

「正しい問い」の上に私たちの生活を新築しよう

今回の東日本大地震で被災した住民の避難所での暮らしをテレビで見ている、非常に印象深く思った場面がありました。地震発生直後、原発事故から逃れてきた 50 歳前後の女性にマイクが向けられ、原発について今後どう思うか、と聞かれると、彼女はすぐには答えず、しばし間をおいて、「考えなくてはなりません。安全という言葉信じて考えてこなかったの、考えます」という言葉を押したように発しました。原発容認でもなく、原発反対でもなく、まず根本から考えることから始めなくてはならないという、断固たる意思を私はそこに感じました。

東電や原発関連機関の「安全」を繰り返す言葉の前では、漠然とした不安感は何の役にも立たなかったし、なにより町の財政は原発によって潤い、雇用も確保され、自分たちの生活そのものが丸ごと原発の上に成り立っていることを考えるなら、原発との共生の中でひたすら「安全」を願うより仕方がなく、それ以外の選択肢はなかったのです。原発の受け入れも反対も自由な中で、原発を選択したのであればまだしも、原発受け入れ以外の選択肢がないところへ追い込まれる中で、今回の原発が起こったことが彼女の脳裡にあったと想像されます。

ただ漫然と考えるのではなく、自分たちの生活を賭けて考えなくてはならない、という覚悟が感じられて打たれたのです。東電にすべてをなすりつけて済む問題ではなく、自分たちも生活の潤いの中で考えてこなかった、思考停止に陥らされてきたことを噛みしめていたと思われます。原発受け入れを継続するなら、一方的に「安全」を信じ込まされてきたこれまでのあり方から脱却して、住民も可能な限り原発体制にかかわらなくてはならないし、原発反対なら、東電からの見返りを期待しないそこそこの生活を覚悟しなくてはなりません。

潤沢な生活も安全な原発も両方望むといったうまい話は、もうありえないのは確実です。彼女の「考えます」は、自分たちの生活に根を張った思考の育みをあらわしていたにちがひありません。生活することで考えないようになっていく、という生活のあり方はまちがっているのではないかと、という声も彼女の言葉から聞こえてきました。生活するように考えていく、といったことから遠ざかっていたことが、原発事故によって照らされたのかもしれませんが。昔も今も生活することじたいが大きなリスクをかかえこんでおり、抜き差しならないところへ私たちは片目を閉じて進んでいるのが感じられるだけに、進むにしても立ち止まるにしても、納得できるかぎりの思考をあらゆる枠組みから解放することから始めなくてはならないと思います。

広島、長崎への原爆投下で敗戦にとどめを刺された日本が、戦後の繁栄を原発で築いてきたという事実は、腹の皮がよじれるほどのブラックユーモアでしょう。原発事故はそのことを思い出させてくれたのです。起こってほしくはないが、起こらなければ見えてこないこともあるのです。彼女の「考えます」は、いま起こっていることをよく見ておきましょう、ということでもあったはず。よく見ない者はよく考えることはできません。敗戦という事態をよく見ないまま、戦後社会の中にすべり込んできた日本人は、今回の大地震が引き起こしている事態の前に、自分たちを素っ裸でなにもかもさらけ出さなければ、一度目は悲劇として、二度目は喜劇として、自分で自分を喰いつづけては

なりません。

『もしドラ』の岩崎夏海さんに、「重要なのは、正しい答えを見つけることではない。正しい問いを見つけることである」というドラッカーの言葉を教わりましたが、「正しい答え」などない、「正しい答え」があるとすれば、「正しい問い」の中にしかない、ということだと受けとめます。「正しい問いを見つけ」ようとせずに、「正しい答え」ばかりを探しつづけてきたのが、日本の戦後です。問いがなければ答えはないし、「正しい問い」にしか「正しい答え」は応えないのです。しかし、戦後、「正しい問い」を発してきた人はたとえごく少数であれ、存在したはずですが「正しい問い」は取り上げられることなく、黙殺されて排除されてきたにちがいありません。

「正しい問い」が本当に「正しい問い」であるかどうか議論し、判断することのできる体制がつくられていないのは、「正しい問い」というものはたいてい組織の利益推進のさまたげになるからです。「正しい問い」は利益推進という偏りにとらわれないなかから突き出されてくるので、どうしても利益推進の方向に立った前提と真っ向から衝突してしまいます。「正しい問い」に向き合って組織していくと、かなりの損失を覚悟しなければならないので、初めからそんな「正しい問い」は排除して、利益推進の前提と衝突しないところでの「正しい答え」のみ考えようとしします。もちろん、その「正しい答え」は今回の原発事故でいえば、電力会社、メーカー、官僚、原子力学会の「ムラ」の馴れ合いのなかで、利益推進を前提とすればなくてはならない対策まで抜く、という精神のメルトダウン状況を引き起こしてしまうのです。

いうまでもなく「原発ムラ」は地域住民の協力なくしては存続できないので、住民もまた「ムラ」の中に取り込まれてしまいます。「ムラ」の一員の学者や専門家が電力会社の代弁者に成り下がっていくように、電力会社の恩恵を受ける住民も不安をはっきりと口にすることを避けるようになっていく、というのが、どこにでもみられるありふれた構図です。このような構図が全国の隅々にまで行き渡り、貫かれて、戦後の日本は経済大国になったことを考えると、今回の原発事故はやはり戦後日本を繁栄させてきたそのありかたが破綻したことを、まざまざとその大惨事の中に浮かび上がらせているのを直視しなくてはなりません。

冒頭の被災者の「考えます」はしたがって、単に原発を電力資源として容認するか、容認しないかといった次元の問題ではなく、日本人の戦後生活の物質的基盤を支えてきたありかたとしての原発を容認するか、容認しないかの次元にまで突き入らなくてはなりません。原発問題を部分としてではなく、自分の生活を丸ごとひっくり返してしまうほどの気迫をもって考えなくては、私たち自身が滅亡する羽目になります。なにを大げさな、という声があるとするなら、いま東日本で起こっている事態はあまりにも大げさすぎて、誰もが声を吞んで立ちすくんでいるのをどう理解すればよいのでしょうか。

「考えます」は「正しい問い」を生きていくためにも、社会を成り立たしめる空気のような「正しい答え」を穿つたたかいを避けてはなりません。「正しい答え」の中に人々が安住するシステムが作動しているかぎり、「正しい問い」は排斥されて、その上に私たちの生活を新たに築くことはできないからです。いまにして思えば、原発の上に成り立っている生活というのは、原発によっていつでも破壊される生活にほかならなかったのです。そう考えれば、原発事故とは原発の上に成り立っている生活の事故だったのです。「正しい問い」を私たちが求めつづけ、生きる希望の中で生活が新たに始まっていくことが、あらゆる生命の死者への本当の供養になると「考えます」。